

一人でも多くの命を救うために

有事の際、国を守る力となる自衛隊。未曾有の被害をもたらした

東日本大震災でも、必死の活動をみせた。

守山区に本拠地を構える

陸上自衛隊第10師団も支援に参加。

人命救助や生活の復興に奮闘した

彼らに、活動に対する思いや、命を守るために取るべき行動を聞いた。

活動を阻む津波の痕 人海戦術で救助を急ぐ

マグニチュード9・0。国内観測史上最大の地震だった。2011年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖地震が発生。震源地から離れた守山区でも震度4を観測した。被災から4分後、防衛省は災害対策本部を設置。被災地を救おうと全国の自衛隊が出動した。守山駐屯地に司令部を置く陸上自衛隊第10師団もそのひとつだ。



建物の2階付近まで積み上げられた瓦礫が津波の高さを物語っている

12日に活動拠点となる船岡駐屯地（宮城県柴田郡柴田町）へ集結。仙台市の南側に位置する仙南地域で人命救助を開始した。

この時、隊員たちが直面したのが「72時間の壁」だ。災害が発生し、建物の下敷きになるなどして救助を待つ人の生存確率は、72時間を境に著しく低下する。救助活動においては72時間が一定のタイムリミットとなっているのだ。

救出が急がれるなか、行く手を阻んだのが瓦礫や泥、そして深く溜まつた海水だった。地震そのものによる被害だけでなく、沿岸部を襲つた巨大津波がもたらしたものだ。「20年の節目を迎えた阪神・淡路大震災と決定的に異なるつていと話すのは、実際に東日本大震災なつているのだ。

たのは、この津波による被害です

と話すのは、実際に東日本大震災なつているのだ。

救援活動は、必ずしも

瓦礫や瓦礫を避けて進むこと

ではない。瓦礫を避けて進むこと

ではない。瓦礫を避けて進むこと